
気が付いたら第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員憑依していたZ E

てんぷら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員憑依していた
ZE

【Nコード】

N5700Z

【作者名】

てんぷら

【あらすじ】

もしも、第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員が憑依してしまったら。何の前触れもなくサーヴァントとして生きることになった彼らは、原作知識を生かした策謀の戦いに身を投じていく。誇りも分別もなく、蔓延る外道戦法の数々。中身が残念なサーヴァント。踊らされるマスター。

果たして、この力オスな闘いのなかで誰が笑うのやら……。

憑依物語始まるよ！（前書き）

ふと、思いついたのでインスピレーションの涌くままに書いてみました。色々至らぬ点がありますが、どうかよろしくお願いします。

憑依物語始まるよ！

気が付いたら、俺は見知らぬ祭壇に立っていた。

え？ どこココ？

確かさつきまで布団でゴロゴロ転がっていたはずだ。ならば、夢の中なのかな。こういうのを明晰夢って言うんだっけ……？

ふと、周囲を観察してみると、二人の男女が目の前に立っているのが見えた。

彼らの顔は一樣に驚きを示していた。

男はスーツの上にトレンチコートを羽織った日系人。女の方は白い髪に赤い瞳、そしてドレスを着た外国人だ。

……… ちょっと待て。

コイツら見覚えがあるぞ。どう見ても、衛宮切嗣とアイリスフィールじゃないか。

彼らとは画面を隔てた、向こう側の世界でしかご対面したことがない。

つまり、俺の脳みそは夢の世界にアニメキャラを出力したわけ、なにを言いたいのかと言うと、
恥ずかしい………。

「あなたが、アーサー王なの……？」

すると、アイリが震えるように声を漏らした。視線はこちらを向いている、つまり今の台詞は俺に向けて発せられたということだ。

おいおい、それじゃまるで俺がセイバーみたいじゃないか。
アーサー王とか、ハハハ。

結論から言おう。

俺は、かの騎士王になっていた。そして第四次聖杯戦争における『セイバー』のクラスに召喚されたサーヴァントだ。

無論、俺には普通の人間としての記憶しかなく、アーサー・ペンドラゴンとしての思い出なぞ皆無に等しい。

しかし、第四次聖杯戦争で剣を振るうセイバーとしての知識はある。

何の因果があつて、この場に、この役目に、この人物に、降りたつたかは定かではないが、これから残り六組の敵と殺し合いを演じなければならぬ。正直、不安だ。

心の内に抱く畏怖など取り払ってしまえ。

考えなければならぬことは多々あるが、俺には原作知識がある。

タイガールート？ プリズマ イリヤ？ 第五次聖杯戦争？ そんなものは知らないね。

他のサーヴァントぶっ殺して、受肉して、そしてサーヴァントの力で世界征服でもしてやんよお！

まずは切嗣との関係を良好にして、アヴァロン全て遠き理想郷を強奪だ。あれと原作知識があれば、イスカンダルやギルガメッシュなど恐るるに足らんわ！

そうと決まれば、早速マスターに挨拶をしようか。

「問おう。お前が俺のマスターか」

side out

「……勝ったぞ綺礼。この戦い、我々の勝利だ……」

魔術師・遠坂時臣は確信した。この黄金のサーヴァントこそ、自らを成就の道へ導く英雄王だと。骨の髄まで貴族を体現した彼にしては珍しく、その笑みを感熱したように紅潮させていた。傍らで控える寡黙の権化、言峰綺礼ですら、英霊に対する驚嘆をこの身を感じるのだった。それは彼がアサシンを召喚したときとは、違った意味での驚きだ。

(アサシンにも少しは風格を持って欲しかったものだ……)

綺礼は己に仕えるアサシン達の奇行を思い浮かべながら、自嘲するのだった。

そして、この場において、最も心躍らせているのは、よりもアーチャー本人だった。

(ヒロインは皆、僕のハーレム入りだ！)

彼はほくそ笑む。

英雄王として、現出した幸運に感謝しながら。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトはホテルの一室で、椅子に座り、寛いでいた。対面の席に腰を落ち着ける男と、愉快気に語らっていたのだ。

「いやはや、英霊とは一体どんな魂胆を腹の内に抱えたのかと訝しんでいたものだが……。まさか、君のような理解ある戦士が来てくれるとは、私も鼻が高い」

「いえいえ、私も貴方のようなお方が我がマスターとなられて感服の至り。是非とも、貴方の武功に一役買いたい」

柔和に微笑みながら賞賛する美丈夫と、その言葉を堪能し悦に入る魔術師の相對する様は、奇しくも長年の友人が語らうようだった。彼らの談話を、赤毛の麗人ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリは、高邁さを漂わせた澄まし顔で静聴している。

「ところで君が聖杯に祈る願望は『第二の生』だったかね」

「正確には、聖杯戦争の後もケイネス殿の雄志を傍らで拝観し続けることに在ります」

「ふん、世辞の巧い奴め」

間桐雁夜は今すぐにでも、目の前で吐き気をする笑みを浮かべる老害を血祭りに上げたかった。

間桐臓硯。

戸籍上は雁夜の父である、この下衆から間桐桜を救うために、臓硯の傀儡に成り果てるしかなかったのだ。

しかし、その呪いは叶ったのだ。他ならぬバーサーカーの手によって。

肉片を周囲に撒き散らし、汚らわしい害虫の死骸が散乱している。これが理想を腐らせた外道の成れの果てであった。

驚く雁夜を尻目に、漆黒の鎧を装着したバーサーカーは、膝をつき深く頭を下げる。狂気ではなく礼儀が、そこにあった。そして誓いを口にする。

「雁夜さん。私と共に桜ちゃんを助けましょう」

こうして、総勢七人のサーヴァントに、七人の意思が憑依した。彼らは物語の結末を知るが故に、物語をねじ曲げていくのだ。

憑依物語始まるよ！（後書き）

もう一作の方がメインなので、更新は亀ですが、絶対書ききります。

パン！ツーン！マル！見えるか！！（前書き）

ユニーク数が凄いことに……。これがタイトルホイホイの効果なのか！？

題材だけにならないよう、頑張ります！

パン！ツー！マル！見えるか！！

主を失った間桐邸で、雁夜はソファに腰を落ち着けていた。本来なら、呑気に休んでいられないのだが、いかんせん身体に蔓延る虫が疼く。恐らくは、この邸宅共々、主人の不在に何らかの拒否反応を起こしているのだろう。

血管が噛み千切り、臓物を汚染し、骨肉はすり潰されている。その痛苦は、これまでとは比べ物にならない激しさだ。

（だけど……桜ちゃんは、それ以上のハズだ）

雁夜は自分の隣で寝息を立てている、幼い少女を見つめた。先ほどまで、迫り来る激痛に声も上げず堪えていたのだ。

自分より遙かにか弱い子供が頑張っている。ならば、大の大人がみっともなく悶える暇などない。

「やはり、聖杯を手に入れるしかないのか」

以前は桜を救うための手段に過ぎなかった聖杯だが、今は自らの目的と化した。

仮に臓硯が生きていて、奴の望み通り聖杯を手にしても桜は救えなかった。聖杯を取り上げられ、ゴミのように捨てられるのが関の山だろう。今となっては後の祭りな仮定だが、雁夜を身震いさせるには十分だ。

（バーサーカーには感謝しないとな……桜）

希望の光は、雁夜を盲目にしていた闇を取り払う。クリアに視界は、目指すべきゴールを瞳に映していく。

たとえどんな悪路がまっついでいようと、あのサーヴァントがいれば、雁夜に怖いものは無かった。

side・バーサーカー

「さて……どうしたのですかね」

僕は間桐邸の自室で、思索に更けています。先程、臓硯氏を粉碎し、鶴夜氏にはダンボールライフを過ごして頂きました。雁夜さんが礼にもならないけどと苦笑しながら、部屋を一室、僕に与えてくれたのです。

雁夜さんと桜ちゃんは、下で休んでいます。虫の件もありますし、しばしの安静が必要でしょう。

バーサーカーに憑依したと知ったときは流石に戸惑いましたが、雁夜さんの末路を知る身としては、大人しく臓硯氏の手駒になるなど論外です。幸い、『狂化』による理性の喪失は見られません。

ならば、雁夜さんの人生に幸あれ。僕はあなたのために、全てを尽くしましょう。

「おや？」

何やら物音が聞こえますね……。しかし、気配は感じられません。
桜ちゃんの自室でしょうか。

僕はドアの前へ行き、少しだけ扉を開きます。僅かな隙間から中を
伺うと、そこには、

「ぐへへ……桜タンのパンツゲットだぜ！」

クローゼットから幼女のパンツを漁っている、髑髏の面を付けた男
がいました。ていうか、アサシンですね。鼻息を荒くして、ハアハ
アしています。気配遮断でも流石に隠し切れませんよ。

下着ドロに人権はないので、そうそうに三途の川を渡ってもらいま
しょう。

「はい、警察ですよ」

「ギツクウ！！　ち、違います！　アツシはブリーフ派の勢力を探
っていただけで、決してクマさんパンツに興味など……」

「嘘です。バーサーカーですよ」

「なあんだ、バーサーカーか……ってバアサアアアあああああ
あああああああああああ！？」

おや、いい絶叫ですね。今月の絶叫MVPを差し上げましょう。
僕は涙目で尻餅をつく、アサシンに近づきます。

「ごごごめんない！　さ、桜タンは僕の嫁なんで手を出しませんか

ら……」

「お嬢さんを決めるのは、桜ちゃん自信ですよ」

僕は優しく微笑みました。顔は見えませんがね。

相変わらずアサシンは無様に土下座をしています。実に、見苦しいですねえ。

「あ、あ、そうだ！」

ふと頭に豆電球を浮かべて、痴漢魔の汚い手で、僕にすり寄ってきました。後で消毒しましょう。

「ここはアッシと手を組みませんか……。見たところ同業者のようですし、元の世界に戻る方法を探せるかも……」

「それは、一理ありますね」

どうやらアサシンも中の人が憑依しています。アサシンは彼一人が複数かは解りませんが、味方をつけることは一つのアドバンテージにもなりますね。

「じゃあ……」

「はい、笑顔でお断りします」

僕は近くにあったハサミを手に取り、アサシンの脳天に突き刺しました。

「がはっ！」

頭から流れ出る赤い液体を止めることもできず、崩れたドミノのよ
うに床に倒れ伏します。そして、幽霊らしく虚無的に消滅する身体。
それが僕の目に映った下着ドロの末路でした。

「あなた程度じゃ足手まといにはなれど、一切の手助けにはなりま
せんよ」

はあ、無駄な魔力を使ってしまった。雁夜さんの身を気遣わな
ければならないのに……。

今日はもう休んで、明日、雁夜さんと桜ちゃんに朝ご飯でも作って
あげましょう。

霊体化しながら、僕は献立に頭を悩ませました。雑炊とかどうでし
ょうか？

side out

宵闇が辺りを飲み込む樹海の中で、二人の男性が密会をしていた。
片方は僧衣を着て、片方は髑髏の仮面を装着している。
言峰綺礼とアサシンだ。

誤解無きように言っておくと、今この場にいるアサシンは、先程敵
陣で醜態を晒した変態とは別個体だ。

彼の事はアサシン達の黒歴史として、闇に葬られることになるだろ
う。

そして今ここに、新たな黒歴史を打ち立てようとするアサシンがい
たのだ。

（やっべえ！ マーボーが俺だけ呼び出したと思ったら、まさかの

生け贄展開！？ いや待て、原作じゃもっと先の話だったような気
もしなくもないような……多分)

「さて、お前に一つ勅命がある」

「はいっ如何様でございましょうか！ 後、今日もご麗しきマーボ
ー臭が漂っていますね」

「偉く気合いが入っているな……」

妙にハイテンションなアサシンの態度に眉を潜める言峰だったが、
彼らの性格にはそれなりに慣れてるので、気にせず話を続行する。

「今からお前は……」

(マーボー！ マーボー！ マーボー！ マーボー！)

「遠坂時臣を速やかに抹殺しろ」

「はいオレ死んだー！ イツエーイ生け贄ばんざあああいー！」

半ば半狂乱で奇声あげるが綺礼は取り合わない。

彼らが、遠坂邸で焼き肉パーティーを開いたり、暴走族紛いの壘行
や、無断での熱海旅行を見てきたので、耐性はとうの昔についてい
る。

「徒に慎重になる必要はないぞ。仮にアーチャーと対峙する羽目に
なるうとも恐れる必要はない」

「なあにが恐れる必要がないだ、こんのクソマーボー！！ オレは

「アンタの無神経が怖いわ！」

「不満か？」

口角泡を吹き散らして喚くアサシンに、綺礼は片手の甲を差し出した。そこには三画の紋様が刻まれている。

「いざという時はこれを遣わざるを得ないがな」

「ちっ……分かったよ」

マスターに聖杯から支給される令呪。その効力にサーヴァントが抗う術は、そうそうない。できれば使われたくない代物だ。だからアサシンは従わざるを得なかった。

「覚えとけよマーボー！」

そう捨て台詞を残し、アサシンは遠坂邸へと全力疾走した。ちなみに、一部のアサシン達は綺礼のことをマーボー、マーボーと呼称している。綺礼は正直、その呼ばれ方が好きではないのだ。

この前の焼き肉パーティーのときも、『マーボーは隅で麻婆豆腐でも食いやがれ！』と叫んで、肉を一枚も与えてくれなかった。

綺礼は麻婆豆腐が嫌いになりつつある。

「逝きましたか……」

綺礼の背後から、髑髏の仮面をつけた女性が現れた。彼女もまたア

サシンだ。

「やつにはアサシン脱落の見せ物になってもらう。他のマスターが残りのアサシンに気づかないようにな」

「あまり、軽々しく殺されるのは不愉快ですね。我々の一部を削られるようなものですから」

不満を隠さない声で女性は頷いた。そして、折角の令呪消費のチャンスが無碍にした生け贄アサシンを、内心で毒づく。

(まあ精々ダンスでも踊って、僅かな余生を楽しみなさい)

そして生け贄にされたアサシンはというと、もの見事に遠坂邸への侵入を進めていた。その侵入方法たるや、踊るように優雅なものだった。

憑依者が得るのは、肉体や宝具だけでなく、その経験や技能も引き継がれる。故に結界魔術をすり抜けるなど、彼には造作もない。

(どんなに巧く通り抜けようが、どう足掻いても絶望ですけどね)

原作知識の通りに進むとすれば、数分ともしないうちに彼はアーチャーに瞬殺されるだろう。

己が短命を嘆きながら、結界を作動する要石に手をかける。

(オレの人生終了!)

.....。

.....。

数分後。

「.....あれ？」

アサシンは難無く要石の破壊に成功し、遠坂邸へと辿り着いた。勿論、途中でアーチャーの手にかけられることはなく、だ。

理由は分からないがアーチャーは原作に従うつもりはないらしい。その仮定にアサシンはホッと胸を撫で下ろした。

「もしかすると、『アサシンが可哀想だから、アーチャーに憑依して助けよう』って展開かもな」

虫の良い妄想をしながら、家内の潜入を進めていった。あわよくば、時臣の抹殺が出来るかもしれない。そして、それを報告したときの綺礼の顔が見たいものだと思つて笑う。

そして.....。

「こちらスネーク。遠坂凜の自室に潜入した。引き続きパンツの捜索を行う」

小学生の部屋に忍び込み、独り言を呟いていた。絶賛、クローゼットをまさぐり中だ。

「ウエへへへへへ。凜ちゃんのパンツどここかなっ？」

綺礼からの名目上の使命を忘れ、下着の蒐集に励むアサシンだった。仮面の裏では鼻の下を伸ばし、気持ち悪いほどにやっつけている。

痴態の権化、ここにありけり。

「おっとハンカチも必要だな。主に使用専用として」

変質行為に熱中するあまり彼は身を隠すことも、気配を遮断することも忘れていた。だから、気づかなかつたのだろう。後ろに黄金のサーヴァントが控えていたことに。

「こちらスネーク。凜ちゃんのパンツは粗方回収した、すぐ本部に帰還する」

「通報しますた」

「了解。すぐさま自首を……あれ？」

今更ながらアサシンは、アーチャーの存在を認知したようだ。黄金の鎧に、逆立つ金髪と紅蓮に煌めく双眸。それらを持ち合わせる、英雄王ギルガメッシュの存在を。

そして、死亡フラグが立ったことに。

「やれやれ……………」

パン！ツーン！マル！見えるか！！（後書き）

変態には然るべき天罰を。今回のテーマはこれですね（笑）

子持ちの人妻とかマジどストライクなんです(前書き)

もうすぐフェイトの1クールが終わりだと思つと寂しくなつてきま
すね。

偽物語楽しみだなあ。

子持ちの人妻とかマジどストライクなんです

「いくら何でも戯れが過ぎる……」

遠坂時臣は、自室の椅子にもたれ掛かりながら頭を抱えていた。その姿は、魔術師ならば優雅たれと、持論を講ずる者とはほど遠い。それほど心労に苛まれているのだ。

どれもこれも総じて、隣でポテチを食いながらアニメを見ている金ピカ野郎が原因だ。

「ぬおっ!? 超展開キター! ヤンデレとかマジいけておらぬか」

「王の中の王ギルガメッシュよ。どうか私の質問に、返答をいたただきたいのですが……」

「うん何? 今、芸術鑑賞の最中なんですけどゴブゴブ」

アーチャーは鬱陶しげにコーラーを飲みながら、曖昧な返事を返す。胸の内では沸々と沸き起こる激情を宥め、時臣は窓の外を指差した。

「何故、あの程度の相手に乖離剣を放つなどという蛮行をなされたのですか!」

指の先には、崩壊した遠坂邸の一部から放射状に抉れた地面があった。その規模たるや、災害の跡と錯覚しても忖度ないほどだ。

臣下の立場をとる時臣だが、いくらなんでも限度というものがある。

遠坂邸の大破の元凶がアーチャーにあると知ったとき、一瞬、『根源』への到達を諦め、令呪をもって自害の宣告を与えようかと考えた。

それでも忠臣としての態度を保ち続けられるのは、ひとえにアーチャーから溢れ出る生まれもつての高貴さと、先ほど見せつけられたら英雄王の力を理解しているからだろう。

「大丈夫だ、問題ない。聖杯戦争はエアを取り出すだけの簡単なお仕事ですから」

ギルガメツシュが一晩で終わらせませす、とか言って親指を突き上げる。皮肉にも、慢心とも云えるその態度に、時臣は安堵を覚えた。僅かな期待を持った眼差しでアーチャーを見つめ、

「それでは、早速他のサーヴァントの討伐を成されるのですか」

「まんどくせ。明日から本気をだす」

「はあ……」

奇妙な言葉遣いをしながらアニメ試聴を続行する彼に、時臣は言葉もなかった。

（綺礼。君と同様、厄介な 否、残念なサーヴァントを召喚してしまったようだ。ようやく、君の徒勞が理解できた気がするよ……）

無性に、葵の料理と凜の人懐っこい笑顔が恋しくなってきた。そう思えるくらい、アーチャーの世話係になりつつある自分を情けなく感じるのだ。

「あ、そうだ！」

そこでアーチャーが突然声をあげた。やる気になってくれたかと時臣は口元を綻ばせる。

「いかが致しましたか英雄王！ 何なりとお申し付けを」

「お義父さん。凜タソと葵さんを僕にください」

「黙れ」

side・セイバー

白雪の降り積もる深山。そこにそびえ立つアインツベルン城の森で、二人の親子が幸せそうに戯れていた。

「ズルいズルいズルい！ キリツグがズルしたー！」

「ハハハ、ゴメンよイリヤ。今度はズルしないからさ、ねっ」

「さあて、^{エクス}約束されたー！」

「やめて！ セイバー！？」

窓越しに黄金の剣を放とうとする俺を、アイリが全力で止めていた。狙いはモチロン切嗣だ。

「いや、ちょっと鬱陶しい衛宮^{ハエ}がいたんでな……。アネスの代わりに制裁をと」

「宝具イコール蠅叩きのね……」

ため息をつくアイリに構わず俺は、切嗣を怒りの籠もった視線で睨みつけた。

あの野郎……。あんな楽しげに幼女と遊びやがって！

「別にハーレムとか興味ないけどさ。こつも家族団欒（笑）を見せつけられると、虫酸が走るんだよね。衛宮ハゲろ！」

「ふふっ」

「何が可笑的い？犯すぞ」

「女同士で!？」

俺の発言に優しく微笑んでいたので、問を投げかける。それにアイリは、母性を持った柔和な表情で口を開いた。

「アーサー王って怖そうだなーとか思っていたのに、こんなに楽しいな女の子だったからつい」

「約束エクスされた」

「待って！別に馬鹿にしたワケじゃないよ」

半ば本気で、約束された勝利の剣エクスカリバーを放とうとしたが、どうやら侮辱されたわけではないようだ。

まあ確かに、中身が男とはいえ、容姿は完全に美少女である。おっ

ばいが残念だけど。しかも元は一般ピーポーな俺だから、もはや只の俺女に過ぎない。

「まあ、明日からビッチを口癖にしたら許してやるよ」

「う、勘弁して……」

暴言に対しマジメに引きつるアイリを無視して、窓の切嗣を注視する。

結局、召喚されて以来、俺は切嗣と一言も言葉を交わしていないのだ。

あらゆる手を尽くして 例えば一日中話しかけ続けたり、靴に画鋏を入れたり、服にゴキブリをいれたりエトセトラ も、結果はアイリのツッコミススキルが向上しただけだ。

この体たらくじゃ、俺の目的も文字通り全て遠き理想郷だ。こうなったら、本当に闘いが嫌いですよ的な、か弱い少女キャラを演じて切嗣に色目を使っておけば良かった……。

こうなったら意地でも全て遠き理想郷を手に入れないといけない。
アツァロン
どんな手を使ってでもな……。

次の日。

俺とアイリは、ボラーレ・イタリア航空のドイツ発チャーター便に乗っていた。無論、冬木の聖杯戦争へと赴くためだ。

「わあ！ 見てみてセイバー！ 雲が浮かんでるー」

隣では、白いカジュアルコートアイリが子供のようにはしゃいでる。その姿からはとても、子持ちのひしよ……じゃなくて子持ちの妻などとは思えない。

そして俺はというと、

「ヒコウキコワイヒコウキコワイヒコウキコワイヒコウキコワイヒコウキコワイヒコウキコワイ……ブツブツ」

水泳の授業を控えた小学生のようにガクブル震えていた。端から見れば、悪霊に取り憑かれたのかと思われるだろう。

正直言って、俺は飛行機が嫌いだ。口でガクブルと言ってしまうくらい嫌いだ。あの三半規管が狂うような不安定さが、どうも気持ち悪い。急に揺られると、パニックを起こしかける……。あんな鉄の塊が飛ぶ訳ないとまでは言わないが、とてもくつろげたものではない。

「ねえ、大丈夫……？」

「もう嫌だ……。海パン一丁で泳いで行けば良かった……」

この時、俺の頭からは聖杯戦争の文字が消え去っていた。早く着け、早く着けとばかりに願っていたのだ。

そして、それはあまりにも突然に訪れた。飛行機が日本の街の上空へと高度を落としたときだ。

「あ、アイリ……エチケット袋を……って、え！？」

機体の至る箇所で、巨大な爆発音が発生した。そして、そのまま墜落を始める。

「きゃあああああああ……！！！！！！」

「助けてえええ！」

「な、何が起こったんデスカー！？」

未曾有の爆破事故に周囲の乗客達が一斉に恐慌状態へと陥った。戦々競々とし、周囲に悲鳴と怒声が飛び交う。人々が無秩序にわめき出す。

そして、数名が機体の外へと投げ出され、自由落下を始めている。

「あれは……！」

地に墜ちていく数多の人間の中で、一人の男が目についた。浅黒い肌、屈強な肉体。そこからは只ならぬオーラを感じる。

「まさかアサシンも憑依してるのか……」

気のせいではなく奴はサーヴァントだ。そして作中のアサシンは、こんなテロ紛いの行為を働くハズがない。

だとすれば、俺の他にも憑依者がいたと考えるのが自然だ。あと、片手にパンツを握りしめていたのは目の錯覚だろう。

「セイバー！」

「このまま着地するぞ！」

俺はアイリの身体を抱きしめ、虚空へとダイブした。風が肌を貫くのを感じながら、重力に身を任せていく。

アイリの体内には、全て遠き理想郷がある。アヴァロンだから、多生の無茶で死ぬ心配ない。てか、死んだら俺が一番困るし。

ふと、俺に抱きかかえられたらアイリがブルリと身を震わせた。

「やっぱり怖いのか」

「違うの。あれを見て！」

地面に着陸する寸前、俺の視界が捕らえたのは。

汚れた体液が溢れ出る、死体を積み重ねたような、肉の山。毒々しい皮膚を張り付けた触手が、蠢いている。それは、辺り一帯の川を我が物顔で蹂躪していた。

「って、海魔アアアアアアアアアアアアアアアア!？」

子持ちの人妻とかマジどストライクなんです(後書き)

はい、早速超展開がきましたねw

ちなみに、アサシンとキャスターはグルじゃないです。

ケイネス先生って赤ザコより強いんだぜ！（前書き）

一日空きましたが何とか更新します。しばらくしたら、ペースが落ちるかもしれません。ご容赦を。

ケイネス先生って赤ザコより強いんだぜ！

「COOL!」

殺人鬼・雨生龍之介は目の前で繰り広げられる惨状に歓喜していた。それは狂喜とも呼べる、狂気に満ちた雄叫びである。

「スゲエよ旦那！ あんな特撮じみたバケモンを呼び出すなんて、やっぱアンタは俺の師匠だよ！」

「……謙遜」

龍之介は傍らで、人皮の魔導書をめくっていた男性に興奮を隠さず語りかける。

青いローブを纏った大柄な男性　ジル・ド・レエはキャスターとして雨生龍之介に召喚された。

そして龍之介は、聖杯戦争についてのあらましを聞いている。全てのサーヴァントやマスター、挙げ句、聖杯戦争の真実まで遍く説明された。

そして龍之介は彼を殺人の師と仰いでいる。なぜなら、キャスターが召喚された次の瞬間、贄として差し出した子供を何の容赦もなく殺したのだ。

それは完全な殺しである。

親に詰られ絞め殺される幻影を子供に見せつけ、死ねない身体にしたまま臓物や骨を一つずつ丁寧バラしたのだ。それは肉体も精神も心も限界まですり潰した、虐殺であった。

COOL!

龍之介は、『青髭』と称した彼に一目惚れした。それは敬愛、親愛、友愛、熱愛、なんでもいい。生涯、雨生龍之介が愛するものは、『COOLな死』と『青髭の旦那』において他ならないのだ。

「カッ！ 昨日の殺人無双といい、オレすんげー生きてるって氣いするぜ！」

「……上々」

騒がしい龍之介とは対照的に、キャスターは終始無表情で口数が少なかった。しかし、言葉に込められた感情は互いに遜色ない。

昨晚、近くの民間人を丁寧に百人くらい虐殺したサーヴァントは龍之介と共に、殺人の余韻を共感し、内心では悦楽に叫喚した。

「ほんと、シ・ア・ワ・セ」

うつとりする龍之介の横顔。それを見てキャスターもまた、

（りゅー君たらニコニコしちゃって可愛いなあ。キャッ！わたしつたら何考えてるのかなハズカシ！。でもでもでも、りゅー君はわたしのご主人様なんだからどんな命令でも聞いちゃうゾ。それでいつかはキスして〜結婚して〜庭付きの家にすみましょ。あ、でも子供はどうしようかな……、魔術でイケる？まあ、子供がいなくても、わたしとりゅー君の愛には何の支障もないけど、ワガママを言えば二人くらい欲しいな。きつと、りゅー君みたいなカツコイい男の子かも！カエルみたいな顔になっちゃったけど、りゅー君が愛

「いきなり何の話？」

謎の怪電波を受信した俺は、アイリの傍らで不意にそんなことを呟いていた。いや、何言ってるんだろうな……。

「それはさておき、あの怪物だが……」

「十中八九サーヴァントの仕業ね。多分キャスターかもしれないわ」

「ああ、嫌々な気配がプンプン香ってるぜ」

炎上する飛行機からの自由落下を無事成し遂げた俺とアイリは、向こうで行われている惨劇を眺めていた。危ないので海魔から距離を取り、適当な高台に立っている。

それにしてもヤベェな。

ここからでも悲鳴や騒音が聞こえてくるよ。

「非道い……」

目の前にあらずとも繰り広げられる悪夢に、アイリは苦痛に満ちた表情をしていた。

「確実にキャスターも憑依者だな」

ギルガメッシュに次ぐ第二のセイバーのストーカーことジル・ド・レエ（正確にはこいつが先だけど）。アサシンが何かしない限り、初っ端から巨大海魔召喚なんて蛮行は、流石のあいつでも行わないはずだ。

大方、憑依して鳩 フェイスになった腹いせに暴れてるんだらうよ。

「あからさまに他のサーヴァントを誘ってるとしたか思えないね。随分と威勢がおありなようだけど、どうするの？」

「そうさなあ……」

放っておけば海魔が街中を食らいつくすだらうし、騒ぎに乗じてサーヴァントがホイホイ参上するはず。見た感じ、相手側も来る客拒まずなようだし……。

つて、あれ？

別に俺が行く必要ないんじゃないん！

黙ってれば誰か一人くらいは海魔退治に赴くし、互いに潰し合ってくれば万々歳だ。そもそもキャスター殺しても令呪を貰えるわけじゃない。

「ふう……」

「せ、セイバー？行かないの」

「それはさておき、せつかく日本を訪れたんだから冬木でも観光しよつぜ」

「それはさておいちゃ駄目でしょ!？」

こんな海魔と闘っていたら日が暮れてしまう。それよりだったら、呑気に街で遊んでいる方が有意義だらうに。

「あいつと闘うなと俺のアホ毛リーダーが叫んでいるし（嘘）、はつきり言ってたるい」

「うわあ……。無関係な一般人が、何人犠牲になると思ってるのよ」

「じゃあ、彼らの死を無駄にしないためにも、俺らは精一杯豪遊しようじゃないか」

「何様のつもりかしら、この王様は……」

二の句が出ないという風に、非難めいた視線を向けられる。きつと死んだモブどもは誰かの心の中で生きているさ。

「それに、ノコノコ敵さんの誘いにつられて、お前にもしものことがあればいけない」

「だけど……」

「解ってくれアイリ!!」

中々承諾しそうにないので、いきなり怒鳴ってみた。こうなれば強硬手段だ。

「怪物に殺されたヤツらは何の意味もなく殺されたと思うか？ 何も果たせないまま死んだと思うか？ 違うだろ！ あいつらの死にも意味があったはずだ！ どんなに小さな事でも、無駄だなんてことはありえねえんだよ！ だから俺たちが、その理由を作るんだよ！ 連中が自分自身の望みを果たせなかっただけ、生きている奴が自分自身の望みを叶えるしかないんだ！ テメエだって自由がいいだろ？ 籠の鳥なんかで終わってんじゃねえよ!! 命を懸けて束

の間の休息を楽しみたいと誓ったんじゃないのよ!? だったら、それは終わっちゃいねえ、始まってすらいねえ。ちよつとぐらいヒドい被害で絶望してんじゃねえよ!! 足を運べば届くんのだ。さあ、いい加減遊ぼうぜ魔術師! もし、テメエが冬木に行かねえって言うんなら、

まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す……ッ!!」

「う、うん、そうね……。意味が解らないけど……」

あまりの迫力に見事騙されてしまうアイリである。

チヨロい、チヨロい。

口から出任せを言い並べれば、存外イケるのね。言ってることは、すんげー支離滅裂だけど……。

「さあ、アイリ。冬木の街を思う存分堪能しよう。さあ!」

俺が先導する形で、歩道までアイリを引きずり込んだ。タクシーを捕まえないといけないな。

おっと……その前に、喉が渴いたからジュースでも買つか。

そして夕方。

冬木市のパチンコ屋で、俺達は楽しく遊んでいた。

「ああ……糞カス！ 少しくらい揃っても良いだろ！！ ゴミパチがあッ！」

出目が思うように揃わず、ひじょーにイラつくので、パチンコの台を蹴りつけてしまふ。足が痛エ。

終始切れ気味の俺に対して、隣の台で打っているアイリはというと。

「わぁ……話に聞いていたけど、パチンコがこんなに楽しいなんて知らなかったわ。今度切嗣も誘おっかな」

ウフフと微笑んで、矢継ぎ早に当たりを出している。幸せそうで何よりですね、あと爆ぜろ。

口にくわえていた煙草を灰皿に押し付け、新たな一本をアイリに向けて火を催促する。

「ほら、早く火い寄越せ」

「さつきから吸いすぎよ……」

軽く咎めながらも、ライターで煙草に火を点火する。そして、俺は新たに一服を始めるのだった。

ちなみに憑依前は未成年だったので煙草は未体験だったが、盗んだ切嗣の煙草を興味本位で吸ってみたら、これがイケるのなんの。

一度煙の味を覚えるてしまうと、どうして病みつきになって、今や一日十本は吸わないと気が済まんほどのニコ中と化したわけだ。

ちなみに人が多い場所での煙草は迷惑なので、禁煙でなくとも自重しよう。

さもなくば俺のように、

「おいテメエ、オレ様の周りでニコチンばらまいてんじゃねえぞ屑
」！」

「す、すみません……」

ジャージを着た隣の客から怒鳴られてしまうのだ。おお、怖い。

「たつく最近の屑ガキは……」

「あれ？」

よく見ると今の客、大したイケメンだな。色気のある端正な顔立ちに、絹のような黒髪、そして目元の黒子ほくろが印象的。

「ってランサーじゃん」

「あん、セイバーじゃねえか」

驚いたことに、隣でパチンコを打っていたのは、槍の英霊　ラン
サーであった。やっぱ、憑依者かな。

俺の背後に控えていたアイリが息を詰つまらせて、眉をひそめた。

「見ようが無しに魅チャーム了だなんて、随分な槍兵がいたものね」

「あ、中古に興味ないんで、お引き取り願えますかあ」

「なんですって！」

ランサーの暴言に、アイリの堪忍袋は一瞬で引きちぎれる。そんな彼女を片手で諫めた。

「落ち着け。それと、ランサー。まさかとは思うがこんなところでドンパチやらかすつもりじゃあないだろうな」

「クククク……」

わざとらしく皮肉な笑いを漏らし、ランサーは俺からパチンコの台へと顔を戻す。傲岸不遜な態度を取っているが、相応の良識は持ち合わせているらしい。
ならば、俺も聖杯戦争のことなど忘れて玉打ちに従事しよう。

まあ、アイツが店を出る頃合いを見計らってから、人気のない場でザシユツと闇討ちを……

「ゲイ・ボウ必滅の黄薔薇！」

「ちよ、おま!?!」

刹那、ランサーの魔槍が俺の手首を抉った。直感のおかげで致命傷は免れたものの、もろに騙し討ちを喰らった。

「セイバー!」

アイリが駆け寄りつつ叫ぶと同時に、店内は一気に野次馬の喧騒で充満した。

周囲の視線もはばかりらず、ランサーはその美貌を悪辣な笑みで歪め

ている。

「ヒヤッハー！ 不意打ちセ・イ・コ・ウー！」

ランサーから必滅の黄薔薇を浴び、俺は利き腕を肘から手首にかけてザツクリと裂かれた。返り血のついた黄色の槍を見て、ランサーは舌で血を拭き取る。そして、満悦したような笑みを浮かべた。

おおよそデイルがやりそうにもない振る舞いだ。

「ランサー、てめえ……」

「クハハハハ！ 俺様が正々堂々と闘ってくれるとでも思ったのか、え？ 騎士王様」

冷静に考えればアサシンやキャスターだって傍若無人に暴れ回ったのだ。それと比べればランサーの蛮行など可愛いものである。ただし、自分が被る害は馬鹿にならないが。甘く見ていた。

騒ぎに引き寄せられたのか、警帽を被った男性が一人、俺達の間を割ってきた。

「ちよいとキミ！ こんなところで凶器を振り回して何のまねだ！！」

「……………」

「おい！ シカトする気か、このクソガキ！！」

空気を読まずにランサーを非難めいた視線で睨みつける警備員さん。確かに、端から見れば頭のイかれた気狂いだ。

しかし、ランサーはそんな諫言は馬耳東風とばかりに黙殺する。

「黙れ屑」

そう短く呟いたときには、黄色の槍が警備員さんの喉元に突き刺さっていた。

「ガッ……あ……ごふっ……！」

喉を裂かれ、絶叫をあげることも出来ないまま床に崩れ落ちた。制服は既に、彼の血で赤く塗りたくられている。

「うわっ警備員殺しやがった！」

「あなたって人は……。それでも英雄なのっ!？」

アイリが悲痛に満ちた声色で、眼前の槍兵を非難する。俺としては警備員さまあと申し上げたいとこだが、反面アイリの義憤は理解できた。

そりゃあ、ちよつと気に障っただけで一般人をぶっ殺すヤツがいたら誰でも疑問に思うでしょ。しかも騎士が。

「……マズいな」

しかし警備員さんの死に感涙する余裕はない。なぜならば、この状況は真剣にヤバいからだ。絶体絶命と言っても良い。

1・俺はランサー（外道）から受けた、必滅の黄薔薇ゲイ・ボウによるダメージがある。結構深刻な傷だ。

2・片腕が使えないので、エクスカリバーの使用不可。

3・逃げようにも目立ちすぎているので、一人ならいざ知らずアイリを連れて行くのは無理。あと、他のサーヴァントが来るかもしれない。

………これ詰んでね？

隻腕で勝てるかどうか微妙だし、絶対あいつ仲間にならないと思うし。

頭を総動員して策謀を練り出す。しかし、そんな俺を嘲笑うかのように、事態は刻一刻と悪化していく。

「これはこれは。随分と早晩に乱痴気パーティーを催しているようだな。え？ アインツベルンのマスターよ」

店頭の前から、陰湿な声と共に一人の魔術師が、ゆっくりと近づいてきた。その表情は、親しげな笑みの裏に底知れぬ憤怒を織り交ぜた悪意ある顔だ。用意の良いことに、人払いの魔術を行使したのか野次馬は誰一人見当たらない。

「ケイネス・エルメロイ・アーチボルト！」

俺が叫んだ名は、ある意味で雁夜おじさんより悲惨な目に逢うだろう魔術師、そしてランサーのマスターである彼のものだ。

「ほう……。偉大なる英霊殿が私の名を記憶しているとは、これは実に光栄」

嫌みたらしく御辞儀をするケイネスのそれは、矜持と傲慢を糧とする魔術師の振る舞いであつた。

ちつ、あのランサーのことだからケイネスを殺してから、ソラウをマスターにしているとばかり思っていたのに。かませの割には、ケイネス先生って時臣よりも強いんだよな……。

「時にランサーよ。この有り様は一体なんだ？ よもや君が愚行を犯した訳ではあるまいな」

「はっ！ それもこれも全て、そこなセイバーとそのマスターが働いた悪行によるものです！」

「待てコラ」

あるうことが、ランサーは俺とアイリにとんだ濡れ衣を着せにかかった。表情もチンプラから騎士のものとなり、ごく丁寧に着替えていらっしやる。

「誤解なきよう言っておきますが、私は場を弁えないセイバーに襲われただけで、完全に正当防衛ですから」

「ご、この野郎……！」

「なるほど、なるほど……」

ランサーの言葉を聞いて、ケイネスはやりわりと笑みを浮かべた。

完全に丸め込まれているようで、全く疑う余地がない。

「フン、見るに値しない輩っぷりだな」

「ちが……」

「そこまで堕ちたか、アインツベルン！」

アイリは必死で誤解を解こうとするが、ケイネスの怒号がそれを許さなかった。その時にはもう、友好的な笑みなど作っていない。あるのは聖杯戦争を辱めた愚者に向ける、怒りだけだ。

「宜しい。ならばこれは決闘ではなく誅罰だ」

その宣告には、ロード・エルメロイと呼ぶに相応しき、威厳と威圧が横溢していた。

ケイネス先生のくせに……、ケイネス先生のくせに！

ケイネスは懐から、水銀が濃縮された試験管を取り出す。後ろではランサーがまだわざとらしい演技を続けている。

「しかもセイバーは、罪の無い一般人を盾にし、私の槍と誇りを汚したのです！ おのれ騎士王！」

お・ま・え・は・だ・ま・れ！

「さあ我が使い魔 否、私の無二の親友ランサーよ。共にこの外道を懲らしめてやろうではないか！」

「御意！」

槍を構えるランサーは、それはそれは極悪な面をしていたのだった。

ケイネス先生って赤ザコより強いんだぜ！（後書き）

ちなみに憑依キャスターのモデルは未来日記のあの人と、めだかのあの人です。

時臣は最近胃薬を箱買いしたようです(前書き)

明けましておめでとございませう。

更新が遅れ、申し訳ありません。話が長引いたので、途中まで投稿
します。

時臣は最近胃薬を箱買いしたようです

遠坂時臣は頭を抱えていた。

先ほど綺礼を通して聖堂教会から連絡が入り、突然召還された魔獣が人々を襲い始めていると伝えられたのだ。胃の痛いことに、アサシン情報によると、この凶行はサーヴァントによるものらしい。

(見境なく暴拳を働く英霊に、それを御せぬマスターか)

そう冷笑しようと努めるが、笑い事で済まされない。冬木のセカンドオーナーに従事する身として、早く手を打たなくてはならない。社会的にも個人的にも背水の陣だ。

「というわけで、トッキーの面目を保守するために、わざわざタコ退治に赴く僕であつた」

「誰に言っておられるのですか？」

現在、アーチャーの宝物庫に貯蔵された黄金の舟　　ヴィマーナへの同乗を時臣は許されている。思考と同じ速度で飛翔する輝舟は、瞬く間に海魔の元へと彼らを誘ったのだ。

「海魔自重しろ」

「同感です……」

見ると海魔は既に人を喰らうことで、独自の魔力精製手段を会得してしまっていた。もはや召還者本人が死んでも、海魔は依然と活動

を続けるだろう。

「王よ。今こそあなたのご意向を知らしめるときです！ さあ、あの怪物に断罪の刃を！！」

「だが断る！」

「え……？」

必死でアーチャーをおだててみたが、にべもなく断られた。しかし、セカンド・オーナーとして、遠坂家当主としてここで食い下がる訳にはいかない。下げるのは時臣の頭だ。

「王の力がどうしても必要なのです。無礼を承知でお願い申し上げます」

「同人誌店買いで手を打とう。全額お前の自腹でな」

「や、約束します……」

あまりにも屈辱的な条件だが（特に時臣が買いにいかされる点）飲むしかなかった。

鬱蒼とした時臣と対照的に、アーチャーは至極満悦といった表情を浮かべている。

歪んだ笑みを作りながら、空間から螺鈿状の刃を持つ 乖離剣工アを取り出した。

「はいはい、天地乖離す開闢の星」
エヌマ・エリシュ

エアから放たれた閃光の渦が、海魔の巨大を丸ごと呑み込んでいく。僅か数秒で、醜猥な魔物は塵芥と化した。

時臣はホツと息を吐いたものの、後々の隠蔽工作を考えると、安堵が憂鬱へ移り変わってしまう。

そもそも何故、これほどの惨事に対し誰一人として英霊やそのマスタ―が一切の対象しなかったのだろうか。下手を打てば、聖杯戦争の続行が危ういものとなったのに。

(これほどの犠牲者がいては隠蔽どころの話ではないな)

怪物の件はメディアアを操作すれば、災害時のパニックによる集団幻覚として処理される。目撃者も大半は海魔の腹の中にいるだろう。数多の被害を巻き起こしてしまったが、逆に最低限の秘匿には繋がってくるだろう。

すると、あらかじめヴィマーナに設置しておいた通信機(もちろん魔術製)から連絡がきた。

「どうした綺礼。……何? ……なるほど了解した。ヤツらは一体何をやっているんだ……」

言伝を受けるとる時臣の顔は平静を装っていたが、内心穏やかではなかった。それはアーチャーから見ても、一目瞭然だ。

「トツキー、どうしたん?」

「どうやら冬木市街の店で、サーヴァントが交戦始めたようで、相当なパニックが……しまった!」

自分がすっかり余計なことを漏らしたと悟り、時臣は思わず口を塞いだ。だが、時すでに遅し。

アーチャーの眼は獲物を見つけた猫のそれだった。そして好奇心は猫を殺すと言う。

「ほお……。じゃれついているサーヴァントは何匹かね時臣くん」

「今のところセイバーとランサーが交戦しております……」

「フヒッ！ 俺得展開キター！！」

歡喜の雄叫びに応じるかのように輝舟は向きを変え、全速力で飛行を始めた。急激な方向転換に、時臣はとっさに船体の縁へ手をかけ身体を支えた。辛うじてバランスを保ちながら、アーチャーに向かって叫ぶ。

「お待ちください！ 無策の戦に赴くのは危険極まりない。無礼を承知で申し上げますが、今回は傍観に徹するのが良法です！」

「それを右から左へ受け流すっ」

「くっ……」

時臣の言葉を聞く耳など、初めからアーチャーには存在しない。全ては、己の欲望を満たすことのみを集約されている。

当然、手の甲に刻まれた令呪を意識せざる得ない。逡巡しつつ、すぐさま命令を出せるように構える時臣だが。

「令呪使ったら、街とトツキーにエアだからな」

悪魔の一言は、微かな反逆すら赦さなかった。

確かに、令呪を運用すればアーチャーを慎重な行動に徹底させることも可能だ。だが、いかなる理由であれ令呪をアーチャーに振りかざせば、間違いなく時臣に竹籠しゅくくわ返しへが降りかかる。

しかも、根源への到達を成就するため、実質的には令呪を二回しか使えないのだ。そして単独行動を持つ故に、自然とアーチャーから見た時臣の利用価値は、微々たるものでしかない。

これでは、ただの体の良い奴隷だ。

そうと理解した上でも、『英雄王ギルガメッシュ』の力は捨てがたかった。ならば、アーチャーの実力が、ハツタリや大言でないことを確かめてやるうではないか。時臣は、そう考えることで、強引に英雄王の慢心への不安を思考の隅に追いやるのだった。

一方、アーチャーはというと。

（まず華麗にランサーをぶっ殺してから、セイバーをお持ち帰りで調教して。そしてそして、他のサーヴァントとマスターを消したら受肉すれば完璧だ！ あとは凜と桜にイリヤを落とせば……夢が広がリング！）

何も考えていなかった。正確には、ハーレムを築き上げることしか頭にないのだ。もはや、アーチャーにとって聖杯戦争など単なる流れ作業だ。

事実、乖離剣エアがあれば、一瞬で決着をつけられるだろう。だからこそ、彼の辞書に警戒の文字など存在しなかった。アサシンが憑依していたことについても、今日の夕食程度にとらえている。

（ギルガメツシュに憑依して、僕もチート主人公だ！）

慢心の二文字が顔に書かれたまま、アーチャーはヴィマーナの舵を振り切った。

とある河川敷で、二組の参加者が相對していた。

片方は、キャスターと雨生龍之介の陣営だ。カッブル

「あれが、神威の車輪ゴルディアス・ホイールかあ！ うーむ、中タイカしたデザインですねー」

「……………めっちゃイケ」

まるでお偉い批評家のように、マジマジと相手の馬車を眺めるキャスターコンビ。場の空気を読もうともしない二人の態度に相手側のマスターは、苛立ちながらも戦々恐々するという非常に器用な反応をみせた。

「お、おいライダー！ なんか宝具がバレちゃってんだけど、もしかしてお前の知り合いなのか」

「……………」

「つて、聞いているのかよ！」

「おっと！」

マスター ウェイバー・ベルベットの声に、ライダーこと『征服王イスカンダル』は妄想の海から帰還した。あることに心を奪われていて、ついボーっとしてしまったのだ。

具体的に言うと、セーラー服を着たウェイバーに心を奪われて。

「ごめんなさいね。あまりにも制服姿が似合うもんだから、アタシったら凝視しちゃった、テヘツ」

舌を軽く出しながら、自分の頭を小突くライダー。ちなみに彼の容姿は、筋骨隆々の大男である。

「似合ってたまるか!!! サツサと脱がせるよ!!」

「あらーん。ウェイバーちゃんったら、照れちゃってカ・ワ・イ・イー!!」

「照れてねーし！」

ヘアピンまで付けられてるが、それでも最低限のプライドは保たなくてばならない。さもなくば、男として大事な何かを無くしそうだ。事実、パチンコ屋でケイネスの姿を見かけた瞬間、ライダーに全力

撤退を命じたウェイバーである。知り合いに、こんな姿を見られた
くなかった。

「アイツらオモしれー。あと、ウェイバーちゃんはCOOLじゃな
くてCUTEだよね旦那」

「……ウェイバーちゃんはヒロイン」

「お前らウェイバーちゃんって言うな！」

キャスターと龍之介の失礼極まりない漫才に、癩癩するウェイバー
ちゃん。隣にいたライダーは、そんなウェイバーちゃんにウツトリ
しながらも、視線を他方へスワイプしていた。
狙いは、眼前の龍之介だ。

（龍之介には学ランが似合いそうね。前をはだけた男子高校生グフ
フフ。あら、はしたない）

淫靡な視線を向けられていることに気づかず、龍之介はウェイバー
を弄いじって遊んでいる。しかし、キャスターは違った。

（アイツ、なに勝手にわたしのりゅー君を見つめてんのよ！ 彼は
わたしだけのもの。だから、誰にも渡さないもん！ って、ニヤつ
くなクソ女！！）

勘違いからキャスターはライバルの存在を認識するに至った。対し
て、ライダーは新たなモデルを拝借しようとしてしか考えていない。

視線と死線が交差する中、乙女の戦が始まるうとしていた。

時臣は最近胃薬を箱買いしたようです(後書き)

セイバーVSランサーは次回です。

パチンコ屋の被害が、ひどいことに……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5700z/>

気が付いたら第四次聖杯戦争のサーヴァントに全員憑依していたZ E

2012年1月5日00時46分発行